10月22日のメッセージ

聖書: ヘブライ人への手紙 11: 32-12:2

「忍耐強く走り抜こう」

長かった聖霊降臨節も今週まで。来週からは降誕前節に入ります。

使徒書(使徒言行録、手紙、黙示録を指す)に聞き、弟子たちの働きを通して語られてきたのは、やはり、「どうやったら救いの道を歩むことができるのか」でした。また、「誰が救われるのか」。そして、「いつ救いが来るのか」。

例えば、先週のフィリピの信徒への手紙では、「その日はいつ来るかわからないから、その日に備えて、神に従う者であり続けよう」と呼びかけられていました(「わたしは、こう祈ります。……キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、……神の栄光と誉れとをたたえることができるように。」フィリピの信徒への手紙 1:9-11)。

今日のヘブライ人への手紙で言及されているギデオンの時代(前 1200 年頃)、神に選ばれる条件は「手で水を掬って飲んだこと」でした(「主はギデオンに言われた。『手から水をすすった三百人をもって、わたしはあなたたちを救い、ミディアン人をあなたの手に渡そう。他の民はそれぞれ自分の所に帰しなさい。』」士師記7:7)。正直、そんなことが条件になるのかとも思いますが、神と共に歩むということは、生活の隅々にまで神経を行き届かせることなのかもしれません。

一方、イエスは、神の国が間近に迫っていると思っている人たちに対して、やはり「ごく小さなことに忠実だったから」誉められる僕の姿を通して、いかなる時も神から離れず、神から託された役割を精一杯果たすことの大切さを教えておられます(「主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』」ルカによる福音書 19:17)。

そして、なによりも聖書は、これらの物語を、忠実で成功した話も、失敗して神から叱られた話も 含めて全てを語り継ぐことによって、神と共に生き、神の救いの中を歩むようにと教えているのです (「子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう/主への賛美、主の御力を/主が成し遂げられた驚くべき御業を。」詩編78:4)。

それは、神と出会った私一人が救われるだけでなく、まだ神と出会っていない者をも救いの道へ招き入れるためでしょう。また、今、救いを、助けを求めてあえいでいる者たちのところへ手を伸ばすためでもあります。

「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、 すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうでは ありませんか、」(ヘブライ人への手紙12:1)

私たちもまた、多くの証人たちの群れに囲まれています。

例えば、イエスは律法の周辺に追いやられている人たちのところへ入って行かれました。

例えば、マザー・テレサは道端で眠るしかない人たちこそ隣人なのだと 声を上げ、手を伸ばし続けました。

例えば、医師であった中村哲は、恒久的な平和と安全のためには対症療法ではなく根本的な解決が必要だと、病院を飛び出し、用水路掘削のために重機を操りました。

例えば、今、パレスチナのガザで避難を余儀なくされている人たちのために声を上げ、何とか事態の改善を図ろうとする人たちがいます。動いたからといって、すぐに状況が変化するわけではありません。それでも、やり続けなければ変わることはないのです。

今、私たちを待っている誰かのために、私たちも先人の後に続いていきたい。今、私たちを待っているのは誰でしょう。その人たちのために、私たちも忍耐強く、粘り強く走り抜こうではありませんか。

